

南のことば、北のことば

秋 月 望

(PRIME 所員、国際学部教員)

今日は朝鮮半島の言葉ということで、二つのポイントに焦点を合わせてお話しします。一つは日本の植民地支配の部分で、もう一つは南北の分断の部分です。

◆「朝鮮語」と「韓国語」

2000年6月に韓国の金大中大統領が分断後始めて平壤を訪問して北朝鮮の金正日国防委員長と会談をしたのですが、この初の南北の最高指導者による公式会談からもう既に8年も経ってしまいました。

このとき平壤からの生中継で、当たり前といえは当たり前なのですが、通訳なしで南北の指導者が言葉を交わしているのを見て、やはり同じ民族なんだと実感した人が多かったと思います。当時、北朝鮮の金正日国防委員長は、ほとんど肉声が報じられたことがなかったため、「まともにしゃべれないんだ」とか「論理的な思考ができないんだ」などという取り沙汰されていたのですが、実際に生き生きと冗談を交えてしゃべっている姿が生で中継されたことで、逆に大きなインパクトを韓国の人たちに与えたということもありました。このように、言葉をしゃべっている姿が様々な衝撃を与える出来事が2000年6月にあったわけです。

ところで、「朝鮮」という呼称は、古代から「衛満朝鮮」「檀君朝鮮」などとあり、1392年に李成桂が開いた王朝も「朝鮮」と称していました。1897年、日本でいうと明治維新から30年ほどたつ

た時点で「朝鮮」から「大韓帝国」と国名を変えました。その後1910年に再び「朝鮮」になります。しかし、これは日本の侵略の結果、「朝鮮」という日本の一地方の呼称とされたものです。つまり、長く王朝名として用いられていた誇らしい「朝鮮」、1910年に国を失って他国の中の一地域を指し示す呼称として用いられた屈辱的な「朝鮮」、現代の韓国人はこの両面性を「朝鮮」という呼称の中に感じ取っているのです。

1945年の日本の敗戦によって朝鮮は日本の植民地から解放されますが、連合国のあいだの思惑が錯綜する中ですぐには独立国家を樹立することができませんでした。3年たった1948年に38度線の南側に大韓民国、北側には朝鮮民主主義人民共和国が成立し、ここで主権国家は回復されたものの、東西両陣営の冷戦が始まる中で二つに分断された形になってしまいました。一方は「朝鮮」という国名、これは誇り高き民族の国家「朝鮮」をイメージしての呼称なのでしょうが、朝鮮という言葉为国名に冠します。もう一方は、大韓民国ということで「朝鮮」は使われません。「韓」という言葉を使ったのです。

このため、北朝鮮では「我々は朝鮮民主主義人民共和国を建てた朝鮮語を話す朝鮮人である」というようなアイデンティティーができて上がります。一方、南の韓国では「我々は韓半島に大韓民国という国を建てて韓国語を話している韓国人である」というアイデンティティーになるわけです。こう

いう事情で、韓国では「朝鮮」という言葉は、自分たちの先祖の国名「朝鮮」—歴史的な用語としての「朝鮮」—、さらに、日本人が見下して使っていた「朝鮮」—日本人から受けた屈辱と差別の呼び方としての「朝鮮」—という意味合いが併存することになりました。

私が韓国に行き始めた1970年代には、韓国で「朝鮮人」と言うと、「いや、我々は朝鮮人ではない、韓国人である」と怒られたものですが、そのときの韓国人にとっての「朝鮮」や「朝鮮人」というのは、日本人の差別的な呼称としての「朝鮮」のイメージや、激しい対立関係にある北朝鮮との対抗的な意識がその背景にあったものと考えられます。さらに、韓国では「朝鮮」という呼び方は使わない方がいいと言われていたのに、現地には『朝鮮日報』という新聞があったり、「朝鮮ホテル」というホテルがあったりするので、訪問者は戸惑うことになるのです。

一方、北朝鮮では、「韓」という呼称はアメリカ帝国主義の手先であるというイメージの用語となっていくわけです。幸か不幸か、ここでは不幸なのですが、東アジアでは漢字を使っています。英語であれば、「朝鮮」であろうが「韓国」であろうが South Korea と North Korea であって両方とも Korea なのですが、我々は漢字を使っているために「韓国」と言うか「朝鮮」と言うかによって、どちらの立場に立つのかを問われてしまうことになるわけです。

「朝鮮語」と「韓国語」という二つの言語名称があります。同じ言葉をしゃべっているにもかかわらず、「私は韓国語が話せます」と言うか「朝鮮語が話せます」と言うかによって、今の日本では聞き手の受け止め方のニュアンスは大きく違います。「韓国語が話せます」というと、日本では韓流ドラマとか韓国の歌手や俳優が思い浮かんだりするのですが、「私は朝鮮語が話せます」というと、ミサイルや核の開発を伝えるアナウン

サーの激しい口調が浮かんできたり、拉致をやっている国の言葉といったイメージを抱かれてしまうという雰囲気もあるようです。

しかし、冒頭の金大中・金正日会談での情景にもあったとおり、「朝鮮語」も「韓国語」も同じ言語です。ただ、地方的な差、つまり方言というのは当然あります。また、言語政策による差異というのもあります。例えば、これは日本語の話ですが、私が小学校のときには「行う」というのは「行」という字に「なう」というふうに振り仮名を打っていた。でも今は、「う」という振り仮名を打つ。これは政策として人為的に決められたものです。人間が言語政策的に決めた部分、特に文字で書くときのルールというのは違いが起きやすいところですよ。例えば「明治」「学院」「大学」とばらばらにして書くか、「明治学院」と「大学」というふうに離して書くか、あるいは「明治学院大学」と全部くっつけて書くか、これも言葉の書きあらわし方の規則であり、約束事なわけです。

ここに韓国で作られた一番大きくてスタンダードな辞典とされている『国語大辞典』があります。こちらは『朝鮮語大辞典』という北朝鮮で編纂された辞書です。日本語では「あいうえお順」で引いて、アルファベットは「ABC順」で引きます。文字の配列というのは、アルファベットや片仮名、平仮名と固定的にあるように感じていますが、これも実は人為的に決められたものです。

朝鮮半島の言語の文字の配列、母音と子音の配列ですが、これは南と北で若干違います。ですから、韓国の配列のつもりで北朝鮮の辞書を探すと出て来なかったり、逆に北朝鮮の語順では韓国の辞書で出て来なかったりするということが発生してしまう。しかし、基本的な文字として、あるいは基本的な言語としての部分というのは両方とも同じ言葉であるのです。

日本社会では「朝鮮」「韓国」の違いはどうなっていたかということ、冷戦の時代には非常に気を使

わざるを得ない状況がありました。1989年にベルリンの壁が崩壊し、その後ソ連が解体して東ヨーロッパの国々も次第に脱社会主義の方向に向かったわけですが、冷戦のもとでイデオロギー対立が激しいその前の時代には、「韓国」と言うか「朝鮮」と言うかでその人の思想的立場が問われるといったことが本当にあったのです。

例えば今、NHKでは韓国語講座というのはオンエアされていません。放送されているのはハンゲル講座です。NHKの語学番組で教えている言葉は韓国の標準語が中心ですが、それを韓国語とは言わないんです。ハンゲルの講座となっています。

ハンゲルというのは文字の名称なんですけど、なぜハンゲル講座と言わざるを得ないかというと、韓国語も朝鮮語も番組名として使えなかったという時代背景があったからです。放送が始まったのは1984年でした。ハンゲル講座ということで、最近「ハンゲル語」という呼び方が出てきていますが、文字に語をつけるのはおかしいわけで、むしろコリア語というような言い方が妥当性があります。

現在は、いろんなキャンペーンもあるし、さまざまな報道もあって、北朝鮮のイメージが日本社会でどんどん悪くなっています。他方、韓国の方は、1万円持っていくと15万ウォンぐらいになる。ちょっと前までの2倍ぐらいです。つまり半分ぐらいのお金で焼き肉が食べられるから、韓国に今行くとお得ですよ、と言われる。それから韓流で韓国のドラマやK-POPSが流行ったりもして、韓国のイメージと朝鮮のイメージの間に非常に大きな落差が生じてきているようです。

こういうわけで、言葉としては同じものなのに、韓国語と朝鮮語が違うものであるかのように思えたり、朝鮮語は敬遠するが韓国語なら学びたいというような感じになってきているように思えます。

◆韓国社会における「北朝鮮」イメージ

では韓国社会ではどうだったのか。韓国では北朝鮮でどのように言葉が使われているかということは長く封印されてきていました。韓国の為政者は北朝鮮のあらゆる情報から国民を遠ざけていたのです。

韓国では113番はスパイ届け出の電話でした。本当にスパイだったら報奨金が3,000万円もらえる。私も旅行で韓国、特に地方に行くたびに、変な言葉をしゃべっているからと、よくスパイとして届け出られていたようです。残念ながら報奨金はもらえなかったようですが。そういう形で、北朝鮮では自分たちとは違う言葉を使っているのだらうという程度のことしか知らされてこなかったのです。

ところが、2000年6月には北朝鮮の指導者金正日委員長が実際に話しているところが生映像で韓国のテレビに映し出されたのです。そうすると、韓国社会に北朝鮮情報が否応無しに拡散していくわけで、為政者としては北朝鮮に対する免疫力や抵抗力を国民につけさせたり、自分たちと北朝鮮が一緒になったときに北朝鮮の人たちをどうやって受け入れるかというような課題が現実のものとなってきたのです。つまり、それまで封印してきた北朝鮮の言葉を、自分たちが話している言葉と、どのように同じか、どのように違うかといった観点から学習させておかないと対応できなくなるかもしれないという時代が始まったわけです。

ソウルでオリンピックが開かれたのは1988年でした。そして、1990年前後から冷戦構造が変化し始めたことで南北関係も次第に変わり始めた。で、さっきの金大中と金正日の映像が2000年6月ですから、オリンピック後の変化から10年以上かかっています。この南北首脳会談と同じタイミングで公開されたのが2000年9月公開の「JSA」という映画です。板門店の南北共同警備区域（JSA）を舞台にした映画で、ソン・ガンホやシン・ハギュ

ンという人気俳優が北朝鮮側の将校や兵士の役を演じています。彼等が北朝鮮風のせりふ回しで演じるのですが、それまで、北朝鮮側の配役は悪役っぽい俳優がやって、韓国側はいい俳優を配すことが多かったのです。また、配役や言葉遣いだけでなく、北朝鮮の人たちが泣いたり笑ったり悲しんだりする「普通の人間」として描かれているのです。さらに、金日成、金正日の肖像も小道具として登場させています。そのような映画が劇場で封切られたのが2000年9月だったのです。

もう一つ、韓国の民放キー局のMBCがやっている韓国語のキャンペーン番組があります。1分程度の短い啓蒙的な番組なんですけど、流行語や言葉遣いの間違いを取り上げるものです。その中で、南側のこういう言い回しを北ではこんなふうに言っているという解説を週1回やっています。このように北朝鮮の言葉を取り上げ始めたのは大体2004年ぐらいからのようです。

さらに、2006年になって二つの映画が立て続けに封切られました。一つは「国境の南」という映画です。これは、北朝鮮から逃げてきたという人たちが、いわゆる「脱北者」をテーマにしたものです。平壤の街並みや平壤の地下鉄をセットで組んで、韓国人が聞くといかにも北朝鮮風とを感じるせりふ回しで北朝鮮を描き出しています。さらに、人気のある男優と女優が北朝鮮の人を演じ、恋をしたり別れたり、涙あり笑いありで北朝鮮社会での人間像を描き出しています。その翌月には「絹の靴」という映画が封切られました。北朝鮮出身の老人夫婦がふるさとに帰りたいと言う。それを無理矢理に偽物のセットなどを作って北朝鮮の故郷に帰ったように仕組む、ありていに言えばだますわけですが、それをコメディータッチで夢をかなえてあげようとするプロセスを描くものです。映画であっても北朝鮮の国旗を使うというのは、本当は韓国ではまだ国家保安法違反なんですけど、映画などではそうやって北朝鮮の姿をイメージさ

せる、それが韓国では2006年あたりには当然のように行われるようになってきたというわけです。

◆訓民正音の成立と「ハングル」の呼称

北朝鮮では韓国の人々がそれだと聞き分けられるほど、顕著に雰囲気の違い言葉を使っています。しかし、それは地域差に過ぎず、言わんとすることは通じているわけで、言語としても使われている文字としても同じものです。朝鮮半島の言語は古代から使われていたものが原形ですが、いま我々が目にするハングルという文字、これは1446年に作られたものです。日本語の片仮名、平仮名が漢字を変形させて作られたのとは違って、ハングルには漢字の人為的に作られた発音記号という側面があります。

モンゴル人が13世紀の後半に中国中原に進出して建てた元からの影響が大きかったといわれています。この元の時代に、今でいう言語学が大いに発達します。朝青龍や白鳳など、モンゴル出身の相撲取りは日本語がうまいですよ。これはモンゴル語が日本語と語順や構造的に似ているところがあるためでしょう。そのような類似性は朝鮮語や満州語にもあります。ところが、中国の漢族の使う漢語はその点でかなり異なる言語です。日本で漢文を読むときに返り点を打って語順を逆転させて読むというような方法が編み出されたのもそのためです。つまり、漢語とは異なる体系の言語を持つモンゴル人が中国に元王朝を建てたことで、支配者であるモンゴル人は漢語を研究して分かるようにしろと要求したわけです。そのためいろいろと研究が進んで母音と子音の存在や母音調和といったようなことが分かってきた。

その成果が高麗時代後期には朝鮮にも伝わり、朝鮮王朝でハングル（当時は「訓民正音」という文字になったというわけです。これは、民を訓めるための正しい音である、つまり漢字で書かれたものが理解できる支配階層ではなく、漢字が読

めない下々の人たちのために作られたもの、これがハングルだったのです。私は高校の世界史で「諺文（オンモン）」と習ったのですが、この「諺」という漢字は「田舎くさい」「ひなびた」という意味です。この「諺文」に対して「真文」というのがあって、これが「本当の文字」、つまり漢字・漢文だったんです。日本語の「仮名」というのも「仮」です。これに対して「真名」というのがあって、こちらが漢字や漢文なんです。ですから日本語の「仮名」と「漢文」というのと、「諺文」「真文」というのは、同じような関係にあったといえます。

ところで、日本語では、この「漢字」と「仮名」を混用して融合する方向に進みました。そのため、21世紀の我々はパソコンやワープロで苦勞するわけです。漢字変換しないと日本語が書けない。ところが、朝鮮半島では「諺文」と「真文」、つまり漢字とハングルを区別して19世紀後半まで使いつけてきた。開化期に入って、つまり近代化のプロセスの中で、「諺文」は「国文」とより肯定的に呼ばれるようになったのです。つまり、それまでの「田舎の文字」という位置づけから「我々の民族の文字」へと価値の変動が起こったのです。1883年に『漢城旬報』という新聞が発刊されます。そして『漢城周報』がハングルで出されます。さらに1897年に『独立新聞』がハングルだけで書かれた新聞として発刊されます。こうしたプロセスを通してハングルこそが自分たち民族のものであるという意識が、非常に強く出てくるのです。19世紀半ばまでの田舎びた古くさい、自分たちのものではあるが何かファッショナブルでないものが、20世紀に入ると次第にそれが自分たちのプライド、またアイデンティティーの一部になり始めたのです。

日本語は古くから仮名・漢字混じりで言葉を文字にする方式でやってきました。そのため仮名と漢字を分離できず、IT時代が到来してキーボー

ドから入力するようになると漢字変換が問題になりました。フロントエンドプロセッサでいかに漢字変換を速く効率的にできるようにするか、これが開発の重要なポイントにならざるを得ませんでした。

一方、朝鮮半島では漢字・ハングル混じり文の歴史というのはそんなにないのです。これは、日本が開化期や植民地支配をしたときに日本的発想として持ち込んだものということができそうです。もともと朝鮮半島ではハングルはハングルだけ、漢字は漢字だけで書くというのが文化伝統で、それは今でも残っています。これはキーボードで打つという点でもとても便利なわけです。もともとハングルは子音と母音の組み合わせという構造ですから、その子音と母音をキーボードのキーに効率的に割り付けることが可能です。さらに、漢字変換なしで打てるわけですから、ローマ字入力して漢字変換して……という日本語よりもはるかに速く打てます。日本語の世界で育った人は「漢字がないと不便だよ」「わかりにくいんじゃないの」と思うのですが、韓国人は別に大変だとは思わないし、漢字があったら逆に邪魔だと思うようです。

こういう形でハングルの位置づけが大きく変わってきたというのは、近代に入ってからなのです。ハングルのハンというのは大きなとか、一つという意味があり、韓国の韓とも同音でつながります。クルというのは文字とか文のことです。ハングルという呼び名は1920年代の後半になって作られたものです。最初は訓民正音、一般には諺文（オンモン）と言われていたのですが、それが国文になり、日本の植民地支配下の1927年あたりから一般に使われるようになってきたものです。

◆日本の植民地支配と言語

日本が大韓帝国を日本の保護国にしたのが日露戦争直後の1905年のことです。そして1910年の8

月に「併合条約」という形をとりつつ、日本は韓国を自国の植民地にしてしまいました。朝鮮は日本の一部ということで、日本語というのが朝鮮においても国語であるということになり、それまでの朝鮮半島における言葉は国語ではなく朝鮮語とされ、日本の中に日本語という国語と朝鮮語とが併存する状態になった。これが言葉から見た1910年です。

1919年に三・一独立運動が起こります。それに先だって2月には東京の朝鮮人学生たちが独立宣言を出すのですが、その独立宣言を書いたのは明治学院で勉強をしたことのある李光洙という人物です。後に有名な小説家になりましたが、創氏改名に協力したということで解放後対日協力者として指弾されました。

この当時、日本は朝鮮を支配しながら朝鮮に恩恵を施しているつもりだったのですが、それが反撃を受けたわけです。我々は独立したいんだと。何か間違っていたかも知れないと考えて出てきた結論が、力で押さえ込む武断政治をやめて懐柔的な支配でやったほうが良いというものでした。1919年9月の斎藤実朝鮮総督の着任後実施されたいわゆる「文化統治」というものです。

例えば、『朝鮮日報』とか『東亜日報』という民族系の新聞を朝鮮語で発行することを認めるといったこともありました。一般的には日本の植民地支配で朝鮮語の使用が抑圧されたというふうに言われています。確かに抑圧されていたのは事実ですが、その一方で、朝鮮語で新聞を出させるなど、「飴とムチ」の「飴」として朝鮮語を使わせるということもやっていました。それで抗日運動を押さえ込もうとするようなところもあったのです。

1929年に光州で朝鮮人学生と日本人学生が衝突をして、それが発端となって反日を掲げた学生運動が起こった。『東亜日報』はハングルでこれを報じました。また、1936年にベルリンでオリンピックが開かれたとき、孫基禎と南昇竜という朝鮮人

選手が日本代表としてマラソンに出場します。そして、孫基禎選手が金メダル、南昇竜選手が銅メダルという好成績を取めました。当時の毎日新聞は「我が孫選手、堂々優勝」とこれを伝えていきます。しかし朝鮮語で発刊されていた『東亜日報』は孫基禎選手の胸の日章旗が見えないように細工して写真を掲載しました。『東亜日報』は、これを問題視した朝鮮総督府によって停刊措置、その後廃刊というところまで追い込まれてしまいます。

朝鮮語というものについて弾圧されたということは事実としてあるんですけども、一方で、さっき言ったように、朝鮮語で出すということについて、それを利用するという側面も日本の植民地支配にはあったということです。

日本の朝鮮支配のやり方が変わってくるのは1930年代以降なんです。1930年に満州事変が起こり、日本が傀儡国家である満州国を建てる。さらに1936年からは日中戦争が始まります。この時期、朝鮮では抗日運動は押さえ込まれていましたが、朝鮮語研究というようなかたちの活動が盛んに行われます。朝鮮のアイデンティティーを確認しようとするということも背景にあったのです。そうした中で、朝鮮語はどのように綴られるべきか、文字表記の約束事をどういうふうに規則化するかというようなことを決めて1933年に朝鮮語研究会が「ハングル正書法統一案」を出します。さらにはその後、朝鮮語の標準語集を出したりして朝鮮語を自分たちのものとする運動が展開されるのですが、これはまさに日本が対中国侵略に乗り出した時代と重なります。

この当時の第8代目の朝鮮総督南次郎は、朝鮮半島において皇国臣民の誓詞や神社参拝を強要する政策をとったのです。そして、この時期から日本語を常用する運動、日本語全解運動というのが始まります。つまり朝鮮語を確立して日本の支配の中で自分たちのアイデンティティーを守っていくとする朝鮮人に対して、日本の支配者は中国

侵略の本格化とともに、朝鮮人に日本語を強要することで侵略と戦争へと駆り立てていこうとしたわけです。朝鮮語を使うことが禁じられたとか、学校で朝鮮語を使ったために先生から罰を受けたなどの回想は大体この時期以降のものです。

これより前の時期の朝鮮人に対する初等教育—普通学校とか簡易学校という学校があったのですが—、そこでは朝鮮語という科目があり、これは必須科目だったのです。普通学校規則で1911年から始まった朝鮮人の初等教育では、国語—これは日本語—と、それ以外に朝鮮語及び漢文というのがあります。これは6時間しかないのですが、朝鮮語を科目として教えていたわけですね。ですから、朝鮮人の子供たちで初等学校に行っていた子供たちは、学校で朝鮮語を履修して、家に帰れば当然朝鮮語でしゃべっていたわけです。学校でも朝鮮語を使ったりしていた。それがなくなるのが1938年、つまり日中戦争が始まって対欧米戦争に突入していく時期で、ここで随意科目という形になります。随意科目—つまり選択科目ですが—というのは名目であって、大体ここからもう朝鮮語を学校でやるということはほとんどなくなっていきます。

さらに1941年になると、朝鮮語というのはゼロ時間にしてしまいます。ここで学校で教えるということとはなくなる。ただ、教えなくてもみんな話せるわけですから、朝鮮語がなくなってしまったわけではなく、学校で教えなくなったということです。しかも、この4年後には日本は戦争に負けてしまいますから、学校教育の中で朝鮮語科目が消されたというのは数年間しか続かなかったということになります。

さらに1942年になると文化領域にも朝鮮語の排斥は拡大して、例えば朝鮮語の文学を除外して日本語での文学だけに賞を与えたりとか、演劇では日本語のせりふを必ず入れさせるようにするとか、レコードを出す場合には、朝鮮語の曲が主であっ

ても必ず日本語の曲を入れさせるとか、台詞が朝鮮語の映画でも必ず日本語を何か所か強調するかたちで入れさせる。朝鮮語のラジオ放送では、日本の民謡とか日本の曲を必ずかけさせる。そういう圧力を強めていったのです。

考えてみれば当然のことなのですが、朝鮮語は日本による植民地支配の中でも朝鮮の人たちの生活の中で息づいていたし、朝鮮語を体系化していくことが日本の侵略に対する抵抗にもなっていたわけです。その中で、日本は侵略遂行のための餌として朝鮮語の教育や使用を制限的にはあれ認めてきたのですが、対外戦争の拡大とともに日本は朝鮮語の使用に対して非常に抑圧的に強力な制約を加える政策に転じていった、ということになります。

◆植民地からの解放と朝鮮語の復活

1945年8月、日本は全面降伏して朝鮮は植民地から解放されるということになります。日本は、36年間の植民地支配で「内鮮一体」をスローガンにして朝鮮人の「皇国臣民」化を図るんですが、あまり成果があったとは言えないのではないかと思います。朝鮮語が理解できない、あるいは下手で、日本語でしかものを考えられないというような人を朝鮮のごく一部では実現させたけれども、一般民衆レベルでは、朝鮮語でコミュニケーションをしてものを考え、日本語も理解できるという、そういうレベルまでしか至らなかったというのが多分実態なのでしょう。

さて、植民地支配から解放された朝鮮半島はアメリカとソ連による分割統治のもとに置られました。これは無条件降伏した日本に対する事後処理の一環として、日本の一部とされていた朝鮮について連合国側でどのように分担するかに端を発したものでした。朝鮮の人々にしてみれば、日本によって支配されていたことによって生じた「もう一つの不幸」にはほかなりません。米ソの分担を区

切るラインとして北緯38度線が設定されたことについてNHKが1992年に放映した番組で、ラスク元米国防務長官がインタビューに答えています。8月15日の前夜、まだ天皇の放送はなかった段階で、日本が内々示してきた降伏表明を受けてアメリカの大統領府でどうやってソ連と占領区域を分割するかということで当時大佐であったラスク氏に線引きが命じられた。ラスク氏によれば、アメリカ側に京城（ソウル）が入るし、ソ連もある程度の地域を分割統治できるので文句はないだろうということで決まったのが北緯38度線だったと回想しています。

朝鮮戦争が始まるのはこの5年後であり、この時は単なる目安となる線でした。38度線を越えて往来することもできるし、そこに地雷が埋められているという状況でもなかったという時代です。

ところで、大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国が建国されるのは1948年ですが、まだ朝鮮半島に正式の国家が樹立されていない時期に学校教育が始められ、そこでは朝鮮語による教育が再開されます。アメリカ軍政のもとで作られた朝鮮語の教科書が配布される場面がニュース映画として残されています。これは、先ほど述べた朝鮮語研究会などが日本の植民地支配下でとりまとめたハングル正書法が活かされたものだったのです。ところが、1948年8月15日に大韓民国が建国され、同年の9月9日に朝鮮民主主義人民共和国が建国されます。ここで朝鮮半島に二つの国が成立し、二つの国の政府はそれぞれ別個に標準語を定め、別々の発音規則や文字表記のルールを定めていきます。そうした中で1950年に朝鮮戦争が始まってしまった。これが決定的なわけです。この1950年に始まった朝鮮戦争は1953年まで、ほぼ3年間続きます。これは朝鮮半島の日常生活の場所が戦場になるというものです。戦線が北に上がっていったり、北から下りてきたりという形で、まさに生活と戦争が共存するというものでした。従って、この戦争

についての責任問題や恨み・怨念というものが日常感覚の中に今日に至っても強く残っているわけです。

3年間の戦闘ののち休戦に入りますが、戦争が終わったわけではなくて休戦であるということです。特に北朝鮮の立場は、アメリカと北朝鮮とは休戦状態にあるという認識です。北朝鮮がアメリカとの交渉にこだわるのはそのためです。朝鮮半島に二つの国ができ、朝鮮戦争が勃発して休戦になり、ラスク大佐とボンスチール大佐が決めた北緯38度線とほぼ重なるラインを休戦ラインとして非武装地帯が設定され、南北の行き来は完全に遮断されることになります。

◆南の言葉と北の言葉

そのため、南北それぞれの言語も、交流がないまま異なった言語政策、異なった言語環境のもとで使われていきます。ただ、ベースは同じものですから別の言語になるわけではないのですが、同じ言語だからこそ、ちょっとした違いに違和感を強く感じるということがあるようです。

韓国においては、建国直後の早い時期からハングルだけを使うハングル専用論もあったのですが、日本の植民地時代からの名残りで漢字も併用してきました。しかし、1970年前後からハングルだけで表記をすることが多くなります。一方、北朝鮮では早い時期から漢字を使用しない方針でやってきました。北朝鮮の最も権威のある新聞『労働新聞』では通常は全く漢字が使われません。一方、韓国の1980年代の新聞では、ヘッドラインは漢字が使われることが多く、記事本文でも漢字が使われていました。そればかりでなく紙面の割付や配置、記事を縦書きにするとともに日本の新聞とよく似ていました。漢字のほうがインパクトがあるという世代がまだかなりいたときの新聞です。その韓国の新聞が大きく変わったのが90年代に入ってからのことです。横書きが主流になって記事の

配置も大きく変わり、記事やヘッドラインからも漢字がほとんど消えています。新聞の一面で漢字で書かれているのは古い大手新聞の題字「朝鮮日報」とか「東亜日報」だけということもあります。こうした漢字を使わないという傾向は、新聞だけではなく社会生活のあらゆる面に広がっており、特にパソコンやネットの時代に入り、キーボードから文字を入力することが一般化した今日、ハンゲルだけというのがとりわけ当たり前になってきました。

こうしたことで、今の韓国においても北朝鮮においても、漢字が読めないとか漢字があると邪魔だという人たちが非常にふえてきたことは事実です。自分の名前を漢字で書けないという日本語の世界にいる人は非常に驚くのですが、いまの南北朝鮮ではそんなに珍しいことではありません。それでほとんど不便はないのですから。ハンゲルだけ使う、漢字を混ぜないというのは昔からの伝統なので、南も北も同じパターンになっています。また、横書きが一般的になったという点でも南北は似てきています。

細かいことですが、ハンゲルの活字が北と南で微妙に形が違うんです。スキャナーで取り込んで文字を認識させる OCR ソフトがあります。以前、韓国で作られた OCR で北朝鮮の印刷物を読ませようとしたのですが、ほとんど認識しませんでした。要するにあれは、ある範囲の中で文字を認識するようになっているのですが、そのパターンに北朝鮮の活字は入っていなかったということなのです。目で見ている限りではちょっと雰囲気が違うという程度で、韓国の人も北朝鮮の活字を問題なく読めるのですが、機械ではカバーできないような差が存在するというようなことです。

南北の違いでは、昔からよく指摘されることですが、語頭の R の音の扱いということがあります。ら行の音というのは日本語でも少ないのです。日本語の国語辞典を見てみると、ら行のところだけ

非常に狭いうえに、外来語がほとんどです。朝鮮語でもら行で始まる音というのは本来避けるという傾向があったのですが、漢字音についてはそれを発音するようにするというのを北朝鮮はルールにしました。従って、さきほどの「労働新聞」は、韓国では「ノドン新聞」と読み、北朝鮮では「ロドン新聞」と言うのです。「冷麺」も韓国では「ネンミョン」と言います。日本の韓国食堂のメニューでもカタカナでこう書かれたものを結構目にします。しかし、北朝鮮では「レンミョン」と実際に発音します。このようなところが南北の違いになってきています。ですから、「レンミョン」と言うだけで北朝鮮の人みたいな感じがするわけです。

さらに、韓国語には英語起源の外来語がたくさんあります。それに対して、北朝鮮の言葉には一部まだロシア語起源の外来語が残っていたり、中国語の影響が残っていたりする。こうした違いもあります。

また、北朝鮮は社会主義イデオロギーを信奉する国で、主体思想という思想を打ち出してきました。ですから、社会主義的な用語や主体思想での独特の言い回しというものが発生しています。一方、韓国は共産主義や社会主義という、実践はもとより研究などまで禁じてきたという歴史が長くあります。社会主義的な用語や言い回しというのは好まれないし、日常生活の中にも浸透していないという違いもあります。

それから、ハンゲルと言ってきましたが、この呼び方は北朝鮮の人にも通じます。しかし、普通はハンゲルとは言わずにチョソングルと言います。また、文字の呼び方や辞書配列で順序が違ったりというようなことが起こっています。

それから、韓国語、朝鮮語では句読点以外の部分でも分かち書きをしますが、どこにスペースを入れるかというルールも、南北で違いが出てきていますから、分かち書きの部分でも違いがあ

ります。

こうみてくると、結構違いがあるのも事実なのですが、2000年の南北首脳会談で金正日国防委員長と金大中大統領、2007年には盧武鉉大統領と金正日委員長も会談をしています。そうしたときに通訳などは無しで相当突っ込んだ複雑な話ができるのは当然です。ただ、若干解説を要する部分があるような感じはします。

実は、かなり前に北朝鮮から出てきた人のインタビューを韓国でやったことがあるんですが、私の語学能力の問題もあるにはあるんですが、テープに録音をとって聞き返してもどうしてもわからない部分がある。それで韓国人に聞いてもらったのですが、やはりわからないというのです。そういうところがいくつかありました。

◆南北の接近と統一に向けて

2000年6月に南北首脳会談が開かれ、その直後の映画「JSA 共同警備区域」が当時としては最高の観客動員数を記録し、その後も韓国の俳優が北朝鮮式のイントネーションや言葉遣いをして北朝鮮人の役を演じることが多くなり、北朝鮮の言葉は韓国にとっては禁断の言葉ではなくなってきています。

朝鮮半島に関しては、最初は日本の敗戦処理の中でアメリカとソ連との別管轄の区域ということで一つの朝鮮が二つの区域に分けられ、そこにそれぞれ別の国家ができることになりました。さらに、不幸なことに武力によって二つの分断された国を何とか一つにしようとする動きが具体化して戦争を招くことになったのです。その朝鮮戦争は3年間もの激しい戦闘の末、北緯38度線付近の休戦ラインで再び南北に分けられるかたちになりました。その後紆余曲折があり、現在は経済的にも国際社会での地位という点からも韓国が北朝鮮に対して非常に優位な立場にあり、北朝鮮は、経済問題、エネルギー問題、食糧問題、それに核やミ

サイルの問題等々をめぐって、かなり国際的には難しい立場に立たされています。

その中で、どのように統一がなされるだろうかというのが大きな関心事項なのですが、政治的な統一については具体的な青写真は描けないけれども、国家や政府が一つになっていくということで、それなりのイメージを持つことができます。また、経済的な統一は、政経分離や異なった体制のもとでの協力ということで、韓国が北朝鮮の中に生産拠点を置いて経済活動を展開するとか、北朝鮮のほうに陸上を通して観光ができるようにするといったことが始まっています。これもかなり具体的なイメージが抱けるものです。

しかし、経済とか政治だけではなく社会の統一とか文化的な統一というのも、一体化していくためには乗り越えなければならない大きい部分であるのです。例えば、ここでお話ししてきた言語的な一体感というのも大きな要素であるわけです。逆に言えば、言語的な違和感というのは、大きな摩擦や問題が発生する要因にもなりかねません。今後、朝鮮半島がどういう形で統一されるか、あるいはどういう形になっていくかというのはまだ不透明ではありますが、言葉の共通性の認識、あるいは自分たちは同じ言葉を共有しているという自覚が必要になります。北朝鮮人が登場する韓国の映画では、初めの頃は観客は北朝鮮の言葉で話していると笑うんです。何か田舎臭いか気持ち悪いとか。しかし、繰り返しそんな映画やドラマが作られるようになってくると、だんだん最近では慣れてきたのか、あまり笑うという反応をすることがなくなってきたように思います。北朝鮮との言葉の共存というのは、私が見る限りにおいては韓国では進んでいるような感じもします。韓国側で意識的にある種のトレーニングとしてやっているわけではないでしょうが、そのような社会的、文化的な一体感、例えば、どういう音楽が心地いいとか、どういう文学が受けるかというような、

そういう文化面あるいは社会面での一体感というのがどのように進展していくのか。この部分は、朝鮮半島の将来を見ていく上でかなり重要なポイントだろうと思います。

さきほども言ったように、政治的な統一問題や経済的な統一問題は、研究者の立場から言っても、どちらかという扱いやすい分野だといえるでしょう。けれども言語も含めて文化的側面から統一問題を考えるというのは結構難しいものがあります。今日も講義の前半部分で、日本の侵略の話と植民地支配における朝鮮語の扱いについての話をしました。自分たちの言語が学校で学べなくなったと

か使うのが禁じられたというのは、後々まで日本の「ひどい侵略政策」として記憶に刻み込まれています。それをみてもわかるように、言葉というのは人間にとっての重要な側面、政治制度や経済の問題と同様、あるいはそれ以上に自分たちのアイデンティティーと関わる部分があるのだらうと思います。

こういうわけで、近代から現代にかけての朝鮮半島の歴史と朝鮮半島で使われている言語というものを考察していくことは、隣国を知るための大きな手がかりの一つではないかと考えているのです。